

百済の盛衰と百済王

枚方百済フェスティバルも第5回を迎えました。このフェスティバルは、国指定特別史跡である「百済寺跡」を、枚方市民の皆様はじめ多くの皆様に広く顕彰する目的で開催しております。大阪府にたった2つしかない国指定特別史跡の一つがこの百済寺跡であります。もう一つは大坂城跡です。大坂城はだれでも知っているのに、百済寺跡は枚方市民の皆様もあまりご存じない。百済寺跡のことをもっと知って頂きたいというのが私たち「百済の会」の願いであります。昨年に引き続きまたお話しさせていただきますがよろしくお願い致します。

昨年お話しをさせて頂いた後で、百済の歴史をもう少し詳しく話してほしかったとのご注文を頂きました。それで今年は百済と百済王について昨年よりは少し突っ込んでお話ししたいと思っております。勿論中心テーマは百済寺跡ということに繋がっていきますので、昨年と重複する点も多いことを予めご了承頂きたいと思えます。

1. 百済国の成立から滅亡まで

(1) 百済国の成立

百済の建国伝説によりますと始祖と言われる温祚(おんそ)が登場します。温祚王は高句麗の始祖とされます朱蒙の第3子でありましたが、異母兄である類利を恐れて兄沸流と共に扶余の地を脱出して南下し、漢山に着きました。温祚は慰礼城に都を定めまして、国の名前を「十済」としました。それは紀元前18年のことであつたと言われます。そしてその後兄沸流が収めた地をも合わせて領土を拡大すると共に、国号を「伯済」に改めました。温祚は紀元後28年まで王様であつたようですが、この温祚を百済の初代王として以後何代目の王という数え方をしています。そして、最後の王が31代義慈王ということになります。この百済寺跡は31代義慈王と関係が深いということを申し上げておきましょう。伯済というのはもともと馬韓という地域連合体のなかの一つであつて、温祚がここに侵入して、支配者になつたとも考えられます。

伯済国は3世紀頃には中国魏・晋の直轄地帯方郡の支配下に入っていたようですが、4世紀に入って314年にその帯方郡を高句麗と共に滅ぼしてしまいます。そして近隣諸国と連合して「百済国」を建設することになります。12代の近肖古王が就任しました340年頃が百済の建国とされているようです。そして364年には古代国家としての体制が整えられますが、それを契機として371年には都は慰礼城から漢城へと移されます。

こうして国家を確立した百済でしたが、475年に高句麗によって王都漢城が攻め落とされて、時の21代王蓋鹵王(がいろおう)は殺害され、子の文周王が南に逃れて熊津(うんじん)、現在の公州ですが、に都を移しました。そして26代の聖明王のときに泗泚(しび)に再び都を移します。現在の扶余であります。そしてこの地で百済王朝は660年の終焉の時を迎えることになります。

(2) 倭国(日本)と百済国との関係

① 三国時代

半島に4世紀の初め頃から7世紀の後半までの間に三国時代と呼ばれる時期がありました。言うならば百済や新羅が古代国家を確立した頃から、新羅が三国を統一した時までを指しているのですが、その三国はわが国との間にいろいろな交流がありました。もっとも一衣帯水と言われる倭と半島との間には、歴史時代より前から民間の交流が深く行われていたわけですが、歴史書に記録を残すようになったのは、この三国時代からと言ってよいでしょう。

日本書紀に最初に「百済」という言葉が見られるのは366年、神功皇后の時代です。倭王使者

を卓淳と百済に遣わしたことが記されています。卓淳とは現在の大邱（てじゅん）辺りにあった伽耶地域の国の一つです。倭国はここを通じて百済と接触を図ります。

391年には倭の軍勢が新羅と百済を破り、高句麗が楽浪郡で倭軍を攻撃したこと、そして404年には倭と百済が新羅を攻めたこと、高句麗が新羅を救援したことなどが確認されます。むかし高句麗の都だった鴨緑江中流の北岸にある集安というところに、「広開土王碑」というのがありますが、その碑は391年から412年まで活躍した高句麗の広開土王の功績を讃えるものですが、その碑文によって、当時の倭軍が新羅に侵入したことや半島の奥深くまで進出していたことが分かります。半島では三国時代と言いますが、倭を含めて4国が争っていた時代と言えるかもしれません。もっとも半島の方ではこの碑文を本物とは認めませんで、戦時中の日本軍による改ざんであろうという説も出されています。

② 任那日本府

464年頃には倭国は百済と新羅の間にある地域、即ち伽耶とか加羅とか呼ばれるところで、今の洛東江沿岸やその西の方一帯ですが、そこに任那日本府と言われる権益を確保します。この日本府の性格について倭国が支配する実質的な国家建設であるとか、いや単なる出先機関に過ぎないとかいろいろの議論がありまして統一見解がないのですが、しかし何らかの権益を確保していたことだけは間違いないでしょう。この任那日本府は、562年に新羅が大加羅を滅亡させたことによって消滅してしまいます。

継体天皇が507年に枚方の樟葉宮で即位されますが、この時代は百済と新羅そして倭が、伽耶・加羅での権益をめぐる力を争い混沌としていた時でした。従って継体天皇は半島問題に大きな関わりを持ちます。継体天皇の登場自体が、半島情勢を考えた大和の豪族たちが武列天皇でそれまでの皇統が途絶えたのを契機として、半島に深い関わりを持っていた継体を担ぎ出したのだとも考えられるのです。継体天皇の頃は百済の都は熊津で、25代武寧王の時代です。武寧王は九州唐津の沖合いにある加唐島で生まれています。百済の勢力を著しく伸張させた王として知られています。

その百済と倭が同盟して新羅と対峙し加羅に6万の大軍を派遣します。その時の司令官が近江臣毛野というのですが、功ならず呼び戻される途中で死んでしまいます。その亡骸を引き取りに枚方まで来た毛野の妻が詠んだ歌が日本書紀に出ています。

「ひらかたゆ 笛吹きのおぼる 近江のや 毛野の稚子い 笛吹きのおぼる」

というものです。「ひらかた」という名前が記録上最初に出たもので、枚方市役所のそばの東中央公園の一角にこの歌を刻んだ石碑が立てられています。

余談ながら「ゆ」「や」「い」というような古語の代表的な助詞が3つも使われていて、言語学的にみて重要な歌であると言われています。「ゆ」という古語ですが、万葉集に有名な「田子の浦ゆ 打ち出してみれば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」というのがありまして、「田子の裏ゆ」は「田子の浦から」という意味を持っています。ひらかたゆの「ゆ」も、「から」という意味になります。

百済の聖明王は538年に熊津から泗沘に都を移します。新羅との対立関係から見て、熊津よりは白村江（白馬江）の下流に当たる泗沘の方が戦略上有利だとの判断からのようです。海で結ばれる倭国との関係もこちらの方がよいでしょう。538年と言えば、わが国に仏教が公伝された年です。百済が倭との関係強化のために使節を送った、その副産物が仏教公伝であったかも知れません。或いは関係強化のための手段としての文化交流であったとも考えられます。

③ 百済国の滅亡

その後、先にお話しましたように伽耶・加羅地域が新羅によって進攻されて562年には任那日

本府も消滅してしまいます。新羅が版図を拡大して百済の伽耶・唐地域における権益も失われることとなります。これを巻き返そうとしてこの新羅支配下の地域に進攻したのが、最後の王となった31代の義慈王です。642年には伽耶・加羅地域の殆どを奪取することに成功しますが、この時に背後を固めるべく倭との関係を強化します。新羅に任那の権益を奪われていた倭国としても、百済との連携強化を図ることに積極的だったでしょう。百済はその連携の誠意を見せるために人質として2人の王子を倭国に送ります。豊璋と禪広です。

しかしながら新羅が、半島に勢力を伸ばしたい中国の唐と結んで百済を攻めたものですから、百済は660年に降伏して滅亡します。その百済の復興運動を企てた鬼室福信などの要請に応じて和国は援軍を派遣します。人質になっていた豊璋が担がれて王として帰国するのですが、豊璋と福信との仲違いなどがあり、また白村江の戦いで倭軍が壊滅的な敗北を喫することによって、復興運動は失敗に終わります。このようにして320年続いた百済国は完全に消滅してしたのです。

また余談になりますが、王子豊璋は藤原鎌足ではないかと推測する説があります。この百済援軍を出したのは女帝の斉明天皇ですが、後の天智天皇である中大兄皇子が摂政をしている時です。鎌足は天智に仕えて蘇我本宗家の蝦夷や入鹿を滅ぼし、大化の改新への道が開かれるのですが、多くの重臣の中で鎌足一人だけが「大織冠」という最高の官位を受けます。中大兄皇子は「豊璋に大織冠を与え、百済に冊封し、本国に送還」したと伝えられます。即ち大織冠に封じられたのは鎌足と豊璋の2人だけです。また、百済への援軍派遣の頃から鎌足は姿を消します。そして、天智天皇即位の頃からまた姿を現すのです。これを見ると、豊璋が表舞台に登場した期間は鎌足が姿を消した期間と丁度重なるわけです。こんなことから、鎌足＝豊璋ということが推測されるのです。ちょっと興味をそそられるお話しではありますが、果たしてどうでしょうか。

2. 百済王の活躍

(1) 百済王と国際情勢

① 渤海国

さて、百済と倭との関係の歴史を簡単に振り返って来ましたが、簡単と言っても時間的には少し長くなってしまいました。次に百済が滅亡したとき日本に人質としてやってきていた百済の王子禪広ですが、当然天皇から大事にされて摂津の国難波に土地を与えられて住むようになりました。禪広は兄の豊璋と共に人質として来たというのが説が有力ですが、否豊璋一人が人質として来たのであって、禪広は663年の敗戦のときに多くの百済人と共にわが国に亡命してきたのだという説もあります。いずれが本当なのかは分かりませんが、禪広が難波に移されたのは事実です。

この難波の地が何処かと言うと、JR環状線の桃谷から寺田町に掛けての辺りではないかと考えられます。桃谷付近からは発掘調査によっていろいろな百済の遺跡が発見されています。

ところで、百済が滅亡してから朝鮮半島でどのようなことが起こったかと言いますと、663年の白村江の戦いの5年後の668年、新羅は高句麗を攻めてこれを滅ぼし、673年には唐を駆逐して半島全土を統一します。統一新羅と呼んでいます。滅ぼされた高句麗は鴨緑江の北方に退いて、そこでいろいろな経過のちに渤海国を建設します。

その渤海国が727年になってわが国に使節を送ってきます。使節は秋田の能代に漂着するのですが、24人のうち16人が蝦夷によって惨殺され、大和に着いて聖武天皇に謁見したのは8人だけでした。しかし渤海国の国書は無事に届けられまして、その中に「本枝百世」という言葉が書かれている、即ち渤海と倭とは常に兄弟関係にあるということで、いわゆる軍事同盟を結ぼうという意味の国書です。明らかに対新羅を意識した国書と言うことができます。天智天皇は百済の滅亡のち、唐のわが国への進攻を恐れて対馬をはじめ各地に要塞やら水城を築きました。しかしその後先にお話ししたように、新羅が唐をも追い出して統一新羅が誕生しましたから、唐の脅威はなく

なっていました。当面の敵は新羅だけです。その新羅に対する同盟の要請ですから、朝廷としては渡りに船だったのではないのでしょうか。

② 蝦夷と百済王

蝦夷の妨害は朝廷にとって重要な問題となりました。恐らくそれまでも蝦夷は朝廷を悩まし続けていたでしょうから、この対策は焦眉の急だったと思われます。高句麗と民族的なルーツを共通にする百済王は、この対策に当たる最適任者だったに違いありません。738年、百済王敬福、禪広の曾孫に当たる人ですが、その敬福が陸奥介に任命されます。そして743年には陸奥守に昇進します。渤海使節は738年に再来し、それ以後奈良時代に13度来日しています。平安時代も加えますと、渤海国が滅亡する930年までに37回わが国にやっています。そして漂着したのは能登だとかそれより南の各地などにも及んでいるのですが、主として出羽の国です。ですから、百済王の一族は敬福の後も、763年に三忠、766年に分文鏡、774年に武鏡、785年に英孫、797年には聡哲というように多くの人が出羽守に任命されています。また、敬福自身は陸奥守から河内守に昇任したのち更に出雲守や南海節度使などになっていますが、南海節度使というのは現代的に言えば連合艦隊司令長官のような地位です。これらはみな渤海使節対策と考えてよいと思います。

(2) 百済王敬福の功績

① 金900両献上

さて、陸奥守に就任していた百済王敬福は、749年に聖武天皇に対して金900両を献上しました。奈良の大仏として親しまれている東大寺の大仏は、743年の聖武天皇の発願によって建立されたものです。743年と言えば丁度百済王敬福が陸奥守に就任した年に当たります。749年には大仏の鑄造がほぼ完成してあとは仕上げを待つばかりになっていました。ところが仕上げに使う金が足りません。そのことで悩んでおられた聖武天皇のもとに、陸奥国から金900両が献上されたのです。陸奥守敬福が任地の多賀城から北に約10キロ離れた涌谷(わくや)というところで採取された砂金を献上したのです。百済からの亡命者の中には、軍事力と共に優れた技術力を持った集団がありまして、恐らく砂金を採る技術も伝えたことでしょう。

金900両というのは大仏仕上げに使う量から見れば不十分なのですが、聖武天皇は欣喜雀躍されて、敬福を従三位宮内卿河内守に昇進させられました。因みに金900両は今の目方で言うと、約13～14キロです。足りなかった金はどうしたかと言いますと、陸奥國小田郡などの租税を免除して金を献上させられたのでした。

大伴家持はこの金産出を慶んで歌を詠んでいます。こんな歌です。

「すめろぎの 御世栄えんと 東なる みちのく山に 黄金花咲く」

この歌は、大伴氏が朝廷守護の武人として忠実に任務を果たすことを吐露した長歌の一節で、この歌の中に戦時中に戦意高揚のために利用された「海ゆかば水く屍 山ゆかば草むす屍 大君のへにこそ死なめ かえりみはせじ」という有名な一節があります。大伴家持の名はこれによって戦中の日本人なら誰一人知ぬ人はないというほどに有名になりましたね。

② 河内守の地

敬福が河内守として与えられた地が、ここ交野郡の中宮です。今の枚方市は昔の茨田郡(まったくぐん)と交野郡から出来ています。天野川の西は茨田郡で東は交野郡です。今の交野市や樟葉の方も含んだ広い地域です。ですから樟葉にも牧野にもカタノという名前を持った神社が存在するのも不思議ではありません。ここ百済寺跡も交野の一部分であるわけです。

また余談を申しますが、交野山をコウノサンと呼んでいますね。何故カタノサンと言わないかと

いうと、明治21年に町村制が公布されまして交野村が出来たのですが、その時の村長が「交野はたいへん広い地域を指している名なのにカタノを名乗るのは僭越だ。だがこれをコウノと呼んだら文句も無かろう。」というのでコウノ村としました。昭和14年の町村合併によってコウノ村とイワフネ村が合併して交野町となり、まさしくカタノと呼ぶようになってコウノ名は消滅してしまいました。その名残がコウノサンという山の名だというわけです。

敬福はこの地に移り住んで河内守としての政治を行ったわけですが、その行政の街としての形が最近の禁野での発掘調査でだんだんと分かってきています。百済寺は百済王氏の氏寺として建立されたわけですが、その伽藍配置の一直線上に街の中心となる道路がまっすぐに伸びているのです。百済寺の他に百済尼寺の存在も確認されています。かなり大きな市街地が存在していたようです。この百済寺を敬福が建て始めたかどうかは明らかではありませんが、これまでの発掘調査では奈良時代末期の建設であると推定されていますから、敬福の後の時代のようなようです。

(3) 百済王明信

① 光仁天皇

さて、聖武天皇は749年、大仏建立の目途がたったのを機会に娘の阿倍皇女に譲位されます。そして孝謙天皇が誕生します。この天皇は女帝ですから実の子はなくて、一時藤原仲麻呂に推戴された大炊王に譲位して淳仁天皇が誕生しますが、天皇は仲麻呂の謀反に連座して淡路島に廃流され、孝謙が重祚して称徳天皇となります。熱心な仏教信徒であった天皇は、病氣治癒にも力のあった弓削道鏡に心酔して、その道鏡に譲位しようとされますが、和氣清麻呂による宇佐八幡宮の託宣によってこれが不成功に終わったという話はあまりにも有名であります。称徳は770年に53歳で崩御されました。

こうなると大変で、直系の後継者がいませんから別のところから誰かを選ばなければなりませんし、しかも淳仁天皇の廃流や称徳天皇の重祚などとややこしい出来事の後ですからなお更です。しかし藤原桃川などが台頭していて、そのバックアップを受けた白壁王が推戴されて光仁天皇が誕生しました。天皇即位のとき既に60歳を超えていたと言いますから、桃川らの策略だったでしょう。皇位継承をめぐる暗殺などの物騒な出来事もありましたから、白壁王は酒に溺れたりして皇位継承の意思のない態度をとられていたと言いますから、本人にとっても寝耳に水だった筈です。百済系の女性を娶っておられたのも、こんな立場から自由に振舞っておられたということでしょう。百済系の女性といってもれっきとした素性の女性で、百済25代の王武寧王の子孫である倭乙継という人の娘です。光仁天皇とこの女性高野新笠(たかののいがさ)の間に山部親王が生まれておられます。のちの桓武天皇です。従って桓武天皇には百済の血が半分入っているわけです。今の天皇もこのことをはっきりと認めておられますね。

光仁天皇は実は、聖武天皇と県犬養広刀自という女性との間の子である井上内親王とも結ばれておられました。そして他戸親王(おさべしんのう)が出来ておられます。補足しておきますが聖武天皇と藤原氏の光明子との間の子が女帝の孝謙天皇です。さて、光仁天皇の跡継ぎとして山部親王が強いか、この他戸親王が強いか、母親の素性からすれば聖武天皇の直系である他戸親王が有利なのは明らかです。しかし、井上内親王のお母さんは藤原氏とは無関係の人でした。藤原氏としては、そのような親王が天皇になることを許しませんでした。そして、井上内親王と他戸親王を密かに抹殺してしまいます。こうして山部親王が次期天皇に即位する環境が整えられました。

光仁天皇の父は施基皇子ですから、光仁は天智天皇の孫に当たるわけです。こうして実は、天武天皇から続いてきた天武系の皇位が天智系へと移ったことになります。藤原氏の祖である鎌足は、天智天皇のもとで勢力を伸ばしましたから、藤原氏としては天智系の天皇を渴望していたかも知れません。その結果として桓武天皇誕生となったと考えることが出来ます。

② 桓武天皇と明信

桓武天皇がまだ山部皇子であった771年に光仁天皇が交野を訪問されました。山部皇子もお供をしておられます。百済王敬福は既に亡くなっており、その子理伯が接待に当たっています。理伯には明信という娘がいて、才色兼備のすばらしい女性だったようです。皇子の接待役をこの明信が勤めたことは想像に難くありません。桓武天皇と百済王明信との最初の出合いです。

山部皇子が天皇になられてから、即ち桓武天皇になられてからの交野行幸は、783年から始まって、785、787、791、792、794、795、799、800、802年と合計10回に及んでいます。如何にお気に入りの場所だったかということは、これを見ても分かります。

交野行幸はいわゆる「野行幸」と言いまして狩りが目的です。当時狩猟は貴族たちの軍事訓練が主目的でありましていくつかの班に分かれて戦争ごっこをやるわけです。桓武天皇の時代は戦争の世紀といっても差し支えありません。東北の蝦夷討伐のための準備が必要だったでしょう。交野だけでなく嵯峨野だとかあちこちで狩猟即ち軍事訓練を行っておられるのです。

ところで、この交野行幸の目的は単なる軍事訓練だけだったかと言いますと、桓武天皇にとっては別の目的、即ち百済王明信とのデートであったように思われます。山部親王時代に明信と出会われた天皇が、明信のことが忘れられず交野へと行幸されたのではないかと考えられるのです。

天皇として交野への最初の行幸は783年ですが、その時明信は既に藤原南家の大物である藤原継縄（ふじわらつぐただ）夫人となっていた筈ですが、この交野行幸に際しても天皇接待の主役を務めた筈です。明信はこの時に従四位尚典（ないしのすけ）に任じられます。尚侍が内侍司（ないしのつかさ）の長官で、尚典は次官です。内侍司というのは天皇の日常身の回りに奉仕するお役所で、今で言うなら宮内庁でしょうか。接待役への功労賞でしょうか、愛する人への贈り物でしょうか、この時から明信に正式に桓武天皇に仕える役職が与えられるのです。当時の天皇にはたくさんの奥方がおられますが、いつも天皇と一緒にいるのはむしろ尚侍や尚典であるわけです。その尚典に明信が選ばれたということは意味があると思われます。

787年には天皇は藤原継縄の別業に立ち寄り、そこを行宮とされました。そして明信はこの時から従二位尚侍に昇進します。この継縄の別業は樟葉にあったと推測されていますが、昔の貴族はいろいろなところに別業即ちお屋敷を持っていましたから、「桓武天皇行宮跡」という石碑の建っている百済王神社の周辺、中宮の何処かにあったことも十分に考えられます。

790年には、天皇は「百済王等は朕の外戚なり」という詔を下しておられます。天皇が如何に百済王を親しく感じておられたかを見て取ることが出来るのですが、これは天皇の母が百済系であるだけでなく、明信への熱い思いから出た詔であったかも知れません。

百済とはどんな国だったのか、百済王とは何者なのか、そして桓武天皇と百済王との関係について、簡単にお話しをさせて頂きました。この後はどうぞ催し物をお楽しみください。ありがとうございました。